

第1回岡崎市総合政策指針審議会 会議録

日 時

令和元年6月18日(火) 14:00~16:00

場 所

岡崎市役所東庁舎4階第二来賓室

出席委員及び欠席者

(出席委員)

NPO岡崎まち育てセンター・りた 事務局長	天野 裕	委員
あいち三河農業協同組合 代表理事組合長	天野 吉伸	委員
岡崎商工会議所 会頭	大林 市郎	委員
東京大学 教授	小川 光	委員
男女共同参画推進審議会 委員	鬼武 孝江	委員
名古屋都市センター センター長	奥野 信宏	委員
愛知県西三河県民事務所 所長	加藤 千春	委員
岡崎市総代会連絡協議 会長	神尾 明幸	委員
岡崎信用金庫 理事	河原 一夫	委員
岡崎市農業委員会 会長	小久井 正秋	委員
連合愛知三河中地域協議会 副代表	小林 正幸	委員
岡崎市観光協会 会長	志賀 爲宏	委員
愛知学泉大学 学長	寺部 暁	委員
岡崎市教育委員	福應 謙一	委員
名古屋大学 教授	福和 信夫	委員
愛知産業大学 学長	堀越 哲美	委員
ミクスネットワーク(株) 常務取締役	森崎 健吾	委員

(欠席委員)

岡崎市医師会 会長	小原 淳	委員
-----------	------	----

(事務局)

副市長	山本 公德
総合政策部 部長	永田 優
総合政策部企画課 課長	岡田 晃典
総合政策部企画課 副課長	山本 英樹

総合政策部企画課 係長 鈴木 昌幸
総合政策部企画課 主事 藤井 聖士

(傍聴者)

5名

次第

1 議題

「岡崎市次期総合計画について」

<会議要旨>

《議題》

事務局より、「岡崎市次期総合計画」について説明。

【各委員の主な意見】

- 具体的にどういったものが岡崎市版のコンパクトシティなのが明確になっていない。コンパクトシティの考え方の一つとして、中心市街地を中心に一定の広さを持つものではなく、住宅地や市街地など特性を持った場所の集積とした方が適しているのではないかと。各々特性を持った集積地が連担することにより、補完し合うことが重要である。その結果として、周辺都市との連担性も生まれてくる可能性が高くなる。このような部分を岡崎市の特色としていってはどうか。
- 自然、歴史、ものづくり、暮らしやすさなどは、コンパクトシティを構成する要素となる。これらを一つの場所に全て含めようとせず、各中心拠点がどの特性を取捨選択するかという考え方が重要である。配置する施設については、全てをモールなどに頼ってはいけない。商店街などは、今後30年を見据え、Society5.0においてAIやドローンで補完できることも考慮しながら、その在り方を考えていく必要がある。
- 行政全体で環境経営が求められる。SDGsの考え方がコンパクトシティを考える上でマネジメントにつながるとよい。
- 記載の内容では、「岡崎愛を育む社会構造の構築」とまでは言えないのではないかと。もっと踏み込む必要がある。
- 地域課題解決の支援について、まちづくりは年齢にかかわらず多様な主体の協働で行うものであるため、生涯を通じた教育の充実と関連するものである。
- 高齢者や女性に対する社会教育が必要である。現状では教育が学校教育と社会教育に留まっている印象がある。これからの社会に求められるのは、成熟した大人である。そのための基盤として、よき市民の育成、シチズンシップ・エデュケーションに取り組むことが、子どもたちが大人になった時に岡崎市に住むことにつながるのではないかと。

- 隣接市町との共通課題を含め、三河地域、西三河地域全体で取り組むような課題について明示した方が、岡崎市らしさが出るのではないか。岡崎市が間に入れば、東三河や尾張とのつなぎ役となることもできる。
- 将来像の例としては、「三河とともに育て、暮らすまち、岡崎」など。三河全体を育てながら、その中で暮らし良いまちを作っていくイメージである。
- 中心市街地のエリアが特定できていない。東岡崎駅と JR 岡崎駅の間あたりが想定されるが、今後、両エリアの特性の分析が必要となる。
- 住民の受け皿という観点では、沿岸部の西三河の人たちの受け皿にもなってくる。市内や周辺地域で働く人だけでなく、やや災害危険度の高い地域からの受け皿という視点も必要である。
- 岡崎市が将来、どのような生業を特徴として生きていくのかが見えにくい。少なくとも教育や研究に近い分野での新たな産業の創出については記載しても良いのではないか。
- 暮らしをキーワードとするのは賛成である。20、30年後を見据えて、岡崎市がどういった暮らしを実現させようとしているのかを、将来像を示すワードも含め検討していく必要がある。
- 暮らしのあり方は多種多様であるが、共通するのは「豊かな暮らし」ではないか。衣食住のみならず、例えば人とのつながり（親戚、町内会、イベントなど）も含まれてくる。具体的には、若い人への職が必ず用意できる、公立学校でも良い教育が受けられるなど、所得だけではない「豊かさ」を実現できるまちである。「豊かさ」を実現するというメッセージを打ち出してはどうか。
- 今後、市北部等で工業団地が発達すると、渋滞等の交通問題が生じる。一方で、後期高齢者の増加に伴い、免許返納による交通弱者の増加もある。こうした2つの公共交通の課題を抱えていくことが予想される中、明確なプロセスを経て30年後に解決するというメッセージが計画の中で出せるとよい。市民アンケートで出ている課題についても、交通の問題が原因になっているものが多いように感じる。
- 岡崎愛を育むには、学校教育が重要である。数年前から「おかぎきの心の歌」として、地域の英傑や景観等の良さを取り入れたものであり、歌を通して岡崎愛が育っていくかと思われる。地域の良さを教材にうまく落とし込むことも大事な取組である。子どもは市の基盤であり、長い目で子どもたちの成長を考えたい。
- 大分県南部の市では、幼稚園から高校卒業までの13年間を見込んだ教育計画を検討している。学びのつながりを大事にすることで、地域への愛着も形成されるのではないか。
- 岡崎市の良さをさらに上げていくためには、様々な分野の問題を解決しなければならず、大変なことである。やってみないと分からないことも多いため、とにかく色々なことに挑戦してほしいと思う。
- 生産緑地について取り上げていただいたことは有り難い。政策指針の中に、「自然環境・森林の持続可能性向上」とあるが、自然環境・森林・農地の持続可能性と農地を加えても

らえるとよい。

- 「農林漁業の振興」が「自然環境・森林の持続可能性向上」に入っており、(しごと) = (経済) から抜けている。また労働力不足への対策については、後継者不足、事業承継の難しさに関してよく耳にする。後継者の養成などをどのように行うのかを書いても良いのではないか。
- 現実に今起こっている課題に目を向けて計画を考えることが重要である。また、周辺地域とどのように共生するか、その中で岡崎市の持ち味をどう活かすかを示していく必要がある。
- 後継者不足問題は切実である。ものづくり企業や零細企業の存続が難しくなっているという問題に対し、30年後に目指す姿を示した上でどのような対策をしていくのかを具体的に考える必要がある。
- 他の地域との連携について考える中では、防災面においても岡崎市の特徴がある。地盤が強固であり地震に強いという特性を活かして、ものづくり産業をできるだけ早く誘致することが重要である。今後、景気は低迷していくことが予想され、今の状態が30年後も続くことはないだろう。
- 国立研究所では、様々なプロジェクトを行われている。商工会議所が働きかけることで、先生方や企業が連携しプロジェクトがスタートすることもある。具体的な岡崎市の強みをベースに置きながら、機敏に動いてほしい。
- 交通においては、地域によっては非常に不便な場所がある。コストの問題もあるが、優しい目で考えてほしい。
- 防災・防犯を一元化した形で、市民を守る安心・安全な岡崎市を作してほしい。
- 将来は政令指定都市を目指すようなプランも考えてほしい。三河を主導できる基盤を今のうちから作っておく必要がある。
- 「総合政策指針の概要」において、「30年後の目指す将来都市像」とあるが、これだけ変化の速い時代に、なぜ30年後なのかを丁寧に説明した方がよい。パッケージの事業変更は随時可とあるが、審議会を設けて変えるのか、市役所内で変えるのかも明確にしていきたい。
- どちらかというとな産業都市より住宅都市の性質が強く、その方向でよいと思う。連携としては、周辺都市にどのような機能を求めるのかを事前に調整することも重要であり、その結果として持続可能な三河地域を目指していけるだろう。
- 「グランドデザインの概要」に、ニュータウンから中心部への高齢者世帯の住み替えとある。ニュータウン(北斗台)は、造成後50年ということもあり、中心市街地に移りたいと考える市民層も多いと思っていたが、実際に話を聞いてみると、緑の多さや静かな町並みなどが理由で居住を継続したいとの声もあった。一方で、車が運転できなくなった時が不安であるとの声もあった。
- 中心部とはどこのことを指しているか分からなかった。資料では、中心部に対する施

策が密で、周辺部は少ないようにも見えるため、見せ方の工夫が必要である。

- コンパクトシティの整備に伴い、交通問題は解決されていく方向にはあると思うが、すぐにそのような状況になり得ないのであれば、高齢者の移動手段の問題などは早めに対応する必要がある。
- 通信インフラがなくては、何もできない時代である。国の重要インフラに位置付けられていることも考慮し、通信環境などについてもどうしていくのかを考える必要がある。その際、Society5.0の要素も盛り込むことで、国とのかかわりも表現できるかと思う。
- 岡崎市にはたくさんの観光資源があるが、市民が認知していないものも多い。まずはそれらをいかに市民に知ってもらうかを考える必要がある。また、フロントエリアの拠点整備が進んでいることも考慮し、従来の観光資源に加えて新たな資源を活用していくという視点も重要になる。市や観光協会が一丸となって、観光客の長期滞在に向けた方策を考えることは、商業・観光産業支援につながってくる。
- 小さな集積が連携をし、つながっていくのがまちの在り方だと思われる。車で30分の移動は理想的だが、高齢者や免許がない人のことを考え、公共交通を含めた範囲で考えていただきたい。
- 通勤を考えたときに、国道1号線と国道248号線を越えたエリアは住みづらいと言われる。若年世帯が中心部に住みたくても高額で住めないという背景もあるため、空き家を取り壊すなどして土地を利活用することなども検討してほしい。
- 「しごと」に惹きつけられて集まってきた「ひと」について掲げているが、労働力不足は大きな課題である。特に、医療、福祉、介護の分野で働いている人の賃金がなかなか上がらない現状があるため、具体的な支援などについても考えてほしい。
- 観光面では、インバウンドについては色々な取組をされていることかと思うが、アウトバウンドにも目を向け、参考になる部分を取り入れる取組もしてほしい。
- 「第7次総合計画 分野別政策指針」に子育て支援、女性活躍支援が入っていることはありがたい。
- 自身は中心部に住んでおり、家の目の前がバス停で、免許返納したが便利である。コンパクトシティの考え方は、現在の自分の生活にも当てはまるものだと感じた。
- 岡崎市は、子どもが育って、就職をし、豊かに暮らしていける都市であると改めて実感した。
- ここでの審議内容が一般の人にももっと伝わっていくと良い。
- 市民としてはこれが誰のための計画なのか、誰のための指針なのかが気になった。実際には、総合計画を読んでいる市民はほとんどいない。市職員のための政策指針であるだけでなく、38万人の行動指針となるようなメッセージが込められているといいのではないか。その点では、「中枢中核都市」は行政用語であり、イメージがしにくい。
- 自分ごとにするという意味では、「暮らしの自給率が高い」ことが岡崎市の特色ではないか。農作物、高度医療、高度教育機関、取水率、森林、木材、観光、仕事など暮らしに

かかわる多くの部分が市内で自給できる点が強みである。これらをさらに高めていくことも指針に入れてほしい。

- 市民活動団体も 550 ほどあり、社会的な課題に向き合う人たちの数も、他の市町と比べて多いのではないか。このような「課題を解決する力」も、暮らしの自給と言える。
- あらゆる分野において、市民自身が選択することで自給率を高めたり、生み出したり、活用したりすることができる。どうしても足りないものは、他の地域から有り難く受け入れる。そのような市政の指針が総合計画で見いだされたら良い。
- 現在、コンパクトシティについて、行政の考え方がまとまりつつある。「アジサイ型」といって、アジサイの一つの花弁を人口 2,000 人から 5,000 人と考え、そこを中心に商店や医療機関、金融機関、小学校などの一次生活支援機能をできるだけ集約した形で整備し、周辺集落の居住者は歩いて生活することができる街である。中心部には機能の異なる花弁があり、それがお互いに連担しながら補完していくといった考え方である。
- 国土審議会では、全自治体の転入転出調査を行っている。その中で所得は高い一方で、転出超過している都市が西三河（刈谷市・知立市）であった。その理由を市職員に訊いたところ、家を建てる土地を見つけにくい。その代わりに、岡崎市や幸田町、大高などを選ぶとのことだった。
- 暮らしをメインに置くことはよい。大学教員の目から見ると、学術研究の基盤があることも特長であると感じる。また観光は、街を磨くのに非常に重要である。
- 言葉などについて、行政的なニュアンスが強いので、そこは工夫してほしい。
- 国の会議でも 30 年先を考える際、地域政策の議論の多くは、減少する人口の取り合いになっている。東京都区部、名古屋市内、大阪市内といった都市部の出生率をどう増やすか、人の滞留促進をしっかりと考えるべきだと伝えている。
- 中枢中核都市に異論はないが、行政用語であるため検討が必要である。

以上